

## ハンガリーの医療事情

盛田 常夫

2019年7月25日のインターネットポータルサイト index.hu は、化学（抗がん剤）療法を受けるために国立癌研究所の廊下で順番待ちしている患者をレポートしている。それによれば、7時30分の診察受付時間にもかかわらず、多くの患者が午前5時頃から建物内の階段付近に行列して待機しているという。なぜなら、診療の番号札を取るために、なるべく早く番号札発行機にたどり着くことが必要だからである。待合室が開くのは7時。本来なら、不要な混雑を避けるために導入された番号札発券機だが、発券機に並ぶ順番を患者同士が決めている。そのために、毎朝、数十人の行列ができる。

ハンガリーでは民間クリニックの腫瘍治療が禁止されている。したがって、標準治療、とくに抗がん剤治療を受ける地方の患者が朝一番の列車で総合病院や癌研の治療を受けに来る。抗がん剤治療は午後3時に終了するので、その日のうちに治療を受けるために、早い番号札を取ろうと、早朝から並ぶ。遅い番号札を引くと、その日のうちに治療を受けられない可能性が高い。そうなれば、翌日に出直さなければならない。このような状況は他の公立病院でも一般的にみられる現象である。

この報道がなされてから、国立癌研究所は早朝に患者を建物内部に入れることを止め、門外に待たせることで建物内の行列を解消している。患者を待たせることなく、患者の立場に立って医療サービスを提供しようという発想が欠如している。

体制転換前から旧社会主義諸国の医療システムには根本的な欠陥があった。その元凶は私が「医師主権」と名付けている医師ファーストの医療体制である。もちろん、医療において医師が中心的役割を果たすのは当然だが、すべてが医師の都合を最大限考慮したシステムとして機能し、患者はそれに受動的に従うしか方法がない。患者受入れサービスという発想自体が存在しないのだ。

だから、社会主義国では長い間、公立病院や地域の公的クリニックには患者を受け付けるシステムがなかった。患者は診療を希望する医師の診察室の前で順番を待つだけで、患者同士が相互に順番を確認し合うか、看護師がドアを開けたときに保険証を渡して診察を受ける。最悪の場合、10名近い患者が我先にと保険証を渡そうとする。この競争から外れた患者は何時まで経っても診療を受けられない。看護師は決して部屋の外に出て患者の診療を誘導することはなく、医師と共に部屋に閉じこもったままである。この状況は多くの病院で今もなお改善されていない。

こういう状況下で、公的保険をもっている、外国人が治療を受けるのは簡単ではない。だから、外国人駐在者や金持ちは公立病院や公的診療所を避けて、民間クリニックで自費診療を受ける。民間クリニックでは診療予約を受け付けるので待ち時間がない。その代わり、公的健康保険は一切利かない。クリニックによっては、健康保険の提示で「10%割引」を謳っているところもある。私はこれを「公的健康保険の割引クーポン化」と名付けている。毎

月払っている健康保険は、割引クーポンの役割しか果たしていないからである。

さらに歪なことに、公立病院内部に民間クリニックが開設されてところもあり、そこでは租界的な医療サービスが行われている。もちろん、賃料を払って開設しているのだが、ダブルスタンダードの医療システムが目で見えるようになっている。民間クリニックには専属医師もいるが、ほとんどは他の公立病院の勤務医で、週何回か民間クリニックで診察業務を行っている。

こういう状況の中で、民間クリニックは繁盛しており、歯科、産婦人科、眼科の順でもっとも多く患者を受け入れている。公的保険料支払いは義務であり、あらゆる種類の所得支払いから自動的に天引きされる。健康保険を使えば治療費は請求されない（手術の際に医師や看護師にお金を渡すが）。しかし、何時治療が行われるか見当がつかない状況が待っている。だから、支払いができる人たちは、最初から民間クリニックへ行く。公的保険は掛け捨てになるが、待ち時間がなく、医師や看護師に「チップ」を支払う煩わしさからも解放される。